

例 文

春はあけぼの。(がよい)やうやうしろくなりゆく山ぎは少しあかりて、(が)紫だちた(紫がかった)

る雲の細くたなびきたる。(ころがよい)夏は夜。(がよい)月のころはさらなり。(のすばらしさ)やみもなほ、ほ(の夜)

たるのおほく飛びちがひたる。(ころがよい)また、ただひとつふたつなど、(ほたるが)ほのかにう(かすかに)

ちひかりて行くもをかし。(の)雨など降るもをかし。(興がある)

秋は夕ぐれ。(がよい)夕日のさして山のはいとちかうなりたるに、(とき)からすのね(が)

どころへ行くとして、みつよつ、ふたつみつなど、飛びいそぐさへあはれな(の)

り。(まいて)雁などの連らねたるが、いとちひさく見ゆるはいとをかし。(たいそう)

日入りはてて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。(聞こえるときのすばらしさ)

〈清少納言「枕草子」より〉

(注) 例文右側は省略された語句、左側は——線部の現代語訳である。

✓ 学習の要点

古典は、一般的には古文で書かれた明治時代以前の作品をいう。

(1) 歴史的かなづかい(旧かなづかい)……現代のものと異なる。

〈例〉やうやう＝ようよう 山ぎは＝山ぎわ

おほく＝おおく 飛びちがひたる＝飛びちがいたる

(2) 古語……現代語と同じでも意味の異なるものがあるので注意する。

〈例〉～なり。～たり。～だ。～である。

をかし＝(古)興がある(現)こっけいだ、変だ

あはれ＝(古)趣がある(現)かわいそうだ、みじめだ

(3) 省略……主語、述語、助詞、体言の省略が多いので注意する。

〈例〉春はあけぼの(がよい) 秋は夕ぐれ(がよい)

山ぎは(が)少しあかりて

(ほたるが)～うちひかりて行く(の)もをかし

雨など降る(の)もをかし

(4) 文語文法……文法では特に次の点に注意する。

① 係り結びの法則……係助詞「ぞ、なむ、か、や」が用いられている

時は連体形で、「こそ」のときは已然形で結ぶ。

〈例〉風の音にぞおどろかれぬ、(完了の助動詞「ぬ」)

しばしとてこそ立ち止まりつれ、(完了の助動詞「つ」)

② 助詞「の」の用法……現代語では「が」と訳せる場合が多い。

〈例〉雲の(＝が)細くたなびきたる

③ 敬語……古文の敬語は複雑である。主語が省略されていても敬語の

種類で推定できることが多い。

〈例〉たまふ＝くださる(尊敬)、いただく(謙讓)

～はべり＝～です、ます(丁寧)

確認問題

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

冬は*つとめて。雪^(a)の降りたるは、いふべきにもあらず。霜^(b)のいとしろきも、また*さらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もてわたるものと⁽²⁾*つきづきし。昼になりて、ぬるく⁽³⁾ゆるびもていけば、火桶^(c)の火もしろき灰がちになりて*わろし。

〈清少納言「枕草子」より〉

(注) つとめて＝早朝。

さらでも＝それでなくても。

つきづきし＝似つかわしい。

わろし＝みつともない。

□(1) かなづかい——線①「いふ」を現代かなづかいに直して書きなさい。

□(2) 助詞「の」の意味——線(a)～(c)の三つの「の」のうち、他の二つ

と意味の異なるものを選び、その記号を書いて答えなさい。

□(3) 解釈——線②「つきづきし」とありますが、何が何に「似つか

わしい」のですか。次から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 炭を持って通って行く姿が、火をおこす姿に。

イ 寒い冬の朝が、火桶の火に。

ウ 火桶の火が、火をおこす姿に。

エ 炭を持って通って行く姿が、寒い冬の朝に。

□(4) 解釈——線③「ゆるび」とありますが、何が「ゆるむ」のですか。

考えて二字で書いて答えなさい。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

*三代の栄耀^{えいよう}①一睡のうちにして、*大門の跡は一里こなたにあり。秀衡^{ひでひら}②が跡は田野になりて、*金鶏山^{きんけいざん}のみ形を残す。まづ*高館^{たかだち}に登れば、北上川南部より流るる大河なり。衣川^{ころもがは}は、和泉^{いづみ}が城^{じやう}を巡りて、高館のもとにて大河に落ち入る。泰衡^{やすひら}③が旧跡は、衣^{ころも}が関^{せき}を隔てて、南部口をさし固め、蝦夷^{えみぎ}を防ぐと見えたり。さても*義臣^{ぎしん}すぐつてこの城^{じやう}にこもり功名一時の草むらとなる。国破れて山河あり、城春にして草青みたりと、かさ打ち敷きて、時の移るまで④涙を落としはべりぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

〈松尾芭蕉「奥の細道」より〉

(注) 三代＝奥州藤原氏、清衡^{きよひら}、基衡^{もとひら}、秀衡^{ひでひら}三代。

大門、金鶏山＝一族の居館、平泉館の正門を「大門」、西方の

築山^{つきやま}を「金鶏山」といった。

高館＝源義経の居館の跡。

義臣＝義経の忠義な家臣。

□(1) 語句の意味——線①「一睡のうちにして」の意味として最も適切

なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 眠るように息をひきとってしまい、

イ うたた寝しているうちに、いつのまにか消えて、

ウ うたた寝の夢のように消えて、

エ 眠っている間に、すべてが終わってしまい、

□(2) 助詞「が」の意味——線②、③の二つの「が」は、現代語ではど

ういう意味ですか。ひらがな一字で書いて答えなさい。

□(3) 主語——線④「涙を落としはべりぬ」は主語が省略されてい

ます。誰^{だれ}の行為か、考えて書きなさい。

練成問題

1 次の古文とその口語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

御乳母^{おんめのと}の日向^{ひうが}へくだるに、賜^{たま}はする扇^{あふぎ}の、片^{かた}つかたは日^ひいとうららかにさしたる田舎^{あな}の館^{たち}などおほくして、いま片^{かた}つかたは京^{きやう}のさるべき所^{ところ}にて、雨^{あめ}いみじう降りたるに、

* あかねさす日^ひにむかひても思^{おも}ひ出^ででよ都^{みやこ}は晴^はれぬ^② ながめすらんと御手^{おんて}にて書^かかせたまへる、いみじう^③ あはれなり。^④ さる君^{きみ}を見おき^⑤ たてまつりて^⑥こそえ行くまじけれ。

(注) あかねさす＝「日」の枕詞。

〈口語訳〉一条天皇の中宮^{ちゅうぐう}(＝皇后^{ていし})定子の御乳母^{おんめのと}が日向^{ひうが}(＝今の宮崎県)へ行^いつてしまふ時に、中宮^{ちゅうぐう}が餞^{せんべつ}別^{べつ}としてお与^よえになられた扇^{あふぎ}の、片面^{ひめん}には日^ひがたいそううららかにさしている田舎^{あな}の屋敷^{やしき}などを多く描^えき、もう片面^{ひめん}には都^{みやこ}のしかるべき所で、雨^{あめ}がひどく降^ふつてい^ゐるところを描^えき、そこに

① に行^いつても思^{おも}ひ出^ですのですよ。都^{みやこ}では私^{わたし}が長雨^{ながめ}に降^ふりこめられて、心^{こころ}も晴^はれずにも思^{おも}ひにふけつてい^ゐるでし^{やう}とね。

と、中宮^{ちゅうぐう}がご自分の手^てでお書^かきになつてい^ゐるのは、とても^②。このような御主人^{ごしゅじん}をお残^{のこ}し申^{まう}上げては、とても行^いくことはできな^いだろ^う。

〔清少納言「枕草子」より〕 10

□ (1) — 線①「の」と、意味・用法が同じものを次から選^えび、記号で答^{こた}えなさい。

- ア 雨^{あめ}がやむのを待^{まち}つ。
イ 私^{わたし}の本^{ほん}はこれです。
ウ 今日^{けふ}は兄^{あに}の帰^{かえ}る日^ひです。
エ どこへ行^いくの。

☐

□ (2) — 線②「ながめ」は「長雨^{ながめ}」と「眺^{なが}め」の掛詞^{かけことば}です。「眺^{なが}め」の意味^{こころ}を口語訳の中^なの語句^{ごこ}を用^{もち}いて書^かいて答^{こた}えなさい。

□ (3) — 線⑤「たてまつり」とい^ふ敬語^{けいご}の種^{しゆ}類^{るい}を次^{つぎ}から選^えび、記号で答^{こた}えなさい。

- ア 尊^{そん}敬^{けい} イ 謙^{けん}讓^{じやう} ウ 丁^{てい}寧^{ねい}

☐

□ (4) — 線⑥「こそ」の下^{した}にはある特定^{ていてい}の活用形^{くわうぎやう}が続^{つづ}きます。

□ ① その活用形^{くわうぎやう}のことばを、文^{ぶん}中^{ちゆう}から一語^{いつご}で書^かき抜^ぬいて答^{こた}えなさい。

☐

□ ② このような文法上^{ぶんぽうじやう}の規則^{きそく}を何^{なん}とい^いますか。書^かいて答^{こた}えなさい。

☐

□ (5) ① にあてはまる一語^{いつご}を、古文^{こぶん}の中^なから書^かき抜^ぬいて答^{こた}えなさい。

☐

□ (6) ② には — 線③「あはれなり」の現代語訳^{げんだいご}が入^いります。次^{つぎ}からあてはまるものを選^えび、記号で答^{こた}えなさい。

- ア 気^きの毒^{どく}だつた イ おそれおかつた
ウ 感^{かん}慨^{がい}深^{しん}かつた エ うれしかつた

☐

□ (7) — 線④「さる君^{きみ}(このようなご主人^{しゅじん})」とは、どんなご主人^{しゅじん}ですか。次^{つぎ}から最^{さい}も適^{てき}切^{けつ}なものを選^えび、記号で答^{こた}えなさい。

- ア 機^き知^ちに富^{とみ}んだ イ 愛^{あい}情^{じやう}のこまやかな
ウ 幼^{よう}く頼^{たの}りない エ 気^き前^{ぜん}のよい

☐

2 次の古文と、その説明文を読んで、あとの問いに答えなさい。

「船^①とくこげ。日のよきに。」^{*}もよほせば、かぢ取り、船子^{ふなこ}どもにいはく、「み船より、仰^{おほ}せたぶなり。朝きたの、いでこぬ先に、綱手^{つなで}はやひけ。」といふ。この言葉の歌のやうなるは、^②かぢ取りのおのづからの言葉なり。かぢ取りは、^{*}うつたへに、^③われ歌のやうなることいふともあらず。聞く人の、「あやしく、歌めきてもいひつるかな。」⁵とて、書きいだせれば、^{*}げに三十^{みそもじ}字あまりなりけり。

〈紀貫之「土佐日記」より〉

(注) もよほせば＝催促すると。

うつたへに、われ歌のやうなることいふともあらず＝必ずしも、自分が歌のような文句を言うと思っているわけではない。
げに＝そのとおり。

「土佐日記」にある、ふしぎな明るさ、ユーモアは、作者の船旅への感興からきています。ことに、作者が今まで知らぬ、船子(水夫)、かぢ取り(船頭)のたたずまい。荒々しい船頭らのありさま、言うことすること、うたうた。

荒くれ男たちは何の教養もない無心な人々ながら、それだけに、言う言葉が、ふと、おもしろいのです。

ある日、「船を早く出せ。天氣がよいのに。」と言いますと、かぢ取りはかしこまって叫びました。「お船のご主人からのご命令だぞ。朝のはげしい北風^{きたかぜ}が吹き出さないうちに、さあ早く綱を引け。」

船旅の一行はそれを聞いて、[※]と興^{きょう}じ入ります。船頭がいつも使っている言葉で水夫に指図すると、自然に、三十一^{みそひともじ}文字の歌になったのです。

^④私は、このくだりを読むと、いつも、以前ラジオで聞いた愉快な天氣予報を思い出します。

「明日^{みょうにち}は北東の風うすぐもり 天氣しだいによくなる見込み」

〈田辺聖子「文車日記」より〉

□(1) — 線①「とく」と同じ意味のことばを、古文の中から二字で書き抜いて答えなさい。

□(2) — 線②「かぢ取りのおのづからの言葉なり」の意味を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 船頭が自分からすすんで言った言葉である。
イ 作者が船頭にじかに命令した言葉である。
ウ 船頭がなにげなく言った言葉である。
エ 作者が船頭自身から聞いた言葉である。

□(3) — 線③「われ」は誰^{だれ}を指していますか。古文の中から書き抜いて答えなさい。

□(4) [※]にあてはまる言葉を古文の中から探し、その最初と最後の三字を書き抜いて答えなさい。(句読点も字数に数えます)

□(5) — 線④「私は」愉快な天氣予報を思い出します」とありますが、「私」はこの天氣予報のどんな点を愉快だと感じたのですか。考えて書いて答えなさい。

3 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

人に * 饗応せられたる物をうましとおもひ、家にてこしらへ食する

時は、外にて食したる時よりは ① あぢはひうまからず。いかにとなれば、

おもひ * ② まうけて食ふがゆゑなり。食ははからずして食するものに

うまみはあり。されば ④ 麁食たりとも、うまきは思ひよらざる所にあ

り。すべて食はうましとまづしといふことなし。その時と處とわが腹中 ⑤

に应じて、口になかなひたるよりうまき物はあるべからず。空腹には生 ⑥

塩を添へたる * 湯漬も、山海の珍味よりうまし。絵の道もしかなり。

初めに画きたるがごとくと望む人あれども、写し出でなば格別、筆勢墨

色すべて前によることなく、おのづから発せし勢ひ、ふた、びならひす

ること ⑥ ありがたし。

(注) 饗応＝ごちそうでもてなすこと。

まうけて＝支度をして。

湯漬＝湯をかけて食べるごはん。

〈雲萍雑誌〉より

10

- (1) — 線①「あぢはひうまからず」、②「まうけて食ふがゆゑ」を現代かなづかいに直して、それぞれひらがなで書いて答えなさい。

□	□
②	①

- (2) — 線③「食ははからずして食するものにうまみはあり」とありますが、「はからずして食するもの」の例として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア いつも行く店で必ず注文するデザート。
- イ 好きな食材だけを集めて作った料理。

ウ 母親と協力して作ったごちそう。

エ 仕事先で休憩中に配られた弁当。

□

- (3) — 線④「麁食」とは、「粗末な食事」という意味ですが、麁食の例として挙げられているものを、本文中から九字で書き抜いて答えなさい。

- (4) — 線⑤「絵の道」とありますが、筆者は、初めに書いた絵と、それを写して書いた絵とで出来ばえが違ってしまふのは、何が異なるからだと述べていますか。本文中から十字で書き抜いて答えなさい。

- (5) — 線⑥「ありがたし」を口語訳して答えなさい。

- (6) 筆者は、最もおいしいものとはどういうものだと述べていますか。「もの」に続く形で、本文中から二十二字（読点も字数に数えます）で採し、その最初と最後の五字を書き抜いて答えなさい。

- (7) 本文の内容に合っているものを次から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 食べ物の味の善し悪しは、食材や調理法で決まるものではない。
- イ 食も絵も、相手の意表を突くようにすると良いものができる。
- ウ 人の味の好みは千差万別であり、粗末な食事を喜ぶ人もいる。
- エ 食事は自分で作るとおいしくないので、人に作ってもらうべきだ。

□(8)「雲萍雑誌」は江戸時代中期に書かれた随筆です。これと同様に、江戸時代に書かれた随筆を次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア「玉勝間」
イ「東海道中膝栗毛」

ウ「折たく柴の記」
エ「方丈記」

オ「伊曾保物語」

4 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

* 法顯三蔵の、^①天竺に渡りて、^②故郷の扇を見ては悲しび、病に臥しては漢の食を、願ひ給ひける事を聞きて、「さばかりの人の、^③むげにこそ心弱き氣色を、^④人の国にて、見え給ひけれ」と人の言ひしに、^⑤弘融僧都、「^{*}優に情けありける三蔵かな」と言ひたりしこそ、法師のやうにもあらず、^{*}心にくく覚えしか。

〈兼好法師「徒然草」より〉

(注) 法顯三蔵＝中国の高僧。

天竺＝インド。

むげに＝ひどく。

見え給ひけれ＝お見せになったものだ。

弘融僧都＝作者と親交のあった僧。

優に情けありける＝やさしく人間味のある。

心にくく覚えしか＝奥ゆかしく思ったものだ。

□(1) — 線①「故郷」、— 線④「人の国」とはそれぞれどこですか。

いずれも文中から書き抜いて答えなさい。

④	①
---	---

□(2) — 線②「願ひ給ひける」を現代かなづかいに直し、すべてひらがなで書きなさい。

--

□(3) — 線③「さばかりの人」とはここではどういう意味ですか。次から選び、記号で答えなさい。

- ア 法顯ほどの高僧
イ それほど気の弱い人
ウ 故郷を恋しがるほどの人
エ すぐ病気になる人

□(4) — 線⑤「心にくく覚えしか」とありますが、誰を奥ゆかしいと思ったのですか。次から選び、記号で答えなさい。

- ア 法顯三蔵
イ 「さばかりの人」と言った人
ウ 弘融僧都
エ 作者(兼好法師)